お雛來る、芋の草採なり。
雨折々降り出でゝからだの惰るき事限りなし。
○秋待たせ給ふか宇治の大納言(呂風)
夕餉の半ば、五島のとめちやん死んだそうなと外に遊びてありし美喜子言ひて歸る、不取敢家内ゆく、風邪熱に心臓麻痺なりし由、自分も浴衣のまゝ直ちにゆく、幼きものは清き哉。ありし日の面影其の儘、顔美しきが眠れる態に母なる人の膝の上にあり、沈める心狀に似たり。

おもひで

函館　小島虎太郎

僕が水彩畫を學んで今年で丁度十年、一昔になる、僕は小學時代よりイヤ生れ付繪は大好きであつた、十年以前までは毛筆や鉛筆などで洋畫紙や何かへ書いた物だ。其の當時よく山の手の英人屋敷へ出入した。主人公はラセルと云ふ英國人で盛んに書いて居つた。尤も水彩畫と云ふ物か何か知らなかつたが唯わけもなく面白いから毎日遊びに出かけ三十錢かのブリキ函の繪具を買ひ、一生懸命習つた、ラセルさんは實に僕の水彩畫の恩人であつたが、都合上三十七年頃歸國された。其の後「月刊スケッチ」を愛讀した。「みづゑ」を手に入れたのは三十八年の夏で、當地の一二堂と云ふ本屋で初めて御目にかゝつた。それは「みづゑ」の第一號で數百の味方を得た樣で實に愉快であつた、それから愛讀者となつて今年で丁度足掛八年古い〳〵御なじみだ。「月刊スケッチ」や白馬會の「光風」又「方寸」などは再び御目にかゝる事が出來ないのに、大黑柱を失つた「みづゑ」が一人尙續刊して居るのは實に喜ばしい次第だ。八年間みづゑ初號より受けたる教へは又甚大な物だ、僕も畫家で立たうとして白馬會でデッサンも少しは學んだ、尙進んで水彩畫研究所へ入りたかつたが、家事上の都合で歸國した實に殘念であつた、此の頃の「みづゑ」は口繪が石版刷で一二枚より付いてなかつた、又繪ハガキ競技會などあつて、毎號出品數約貳百枚、出品者五十名位、殘念ながら僕は五等か八等より上れなかつた、其の時僕等と共に出品した赤城君や相田君等は專門家になられたが僕は今尙みづゑの愛讀者として、又アマチュアとして勉强して居るにすぎない、が繪を書く御蔭で物を見ても他人より面白く、旅行などしてスケッチして來た畫を見ると、其時の有樣を思ひ出し實に愉快なものだ。

▲本郷洋畫研究所　洋畫家藤島武二、岡田三郎助兩氏教授となり井上雄太郎富永勝重兩氏委員として本郷春木町二の二九に洋畫研究所を創設し午前は藤島、午後は岡田氏擔當して外に夜學部をも設け且つ時々講話會を開き年一回競技大會を催す筈と。